

V 基準ごとの自己評価

『理念と目標』

1 理念と目標

基準 1-1

各大学独自の工夫により、医療人としての薬剤師に必要な学識及びその応用能力並びに薬剤師としての倫理観と使命感を身につけるための教育・研究の理念と目標が設定され、公表されていること。

【観点 1-1-1】理念と目標が、医療を取り巻く環境、薬剤師に対する社会のニーズ、学生のニーズを適確に反映したものとなっていること。

【観点 1-1-2】理念と目標が、教職員及び学生に周知・理解され、かつ広く社会に公表されていること。

【観点 1-1-3】資格試験合格のみを目指した教育に偏重せず、卒業研究等を通じて深い学識及びその応用能力等を身に付けるための取組が行われていること。

[現状]

本学は昭和7年、神戸女子薬学専門学校として開校した。『創学の精神』は、“科学的素養を身につけ、社会に貢献できる女子を育成し、薬剤師資格を得て社会で女子が自立できることを目的とする”である。しかしながら、社会情勢の大きな変化により、女子のみを対象として薬学教育をすることの社会的意義が大きく減少したことにより、平成6年に男女共学制を導入し、大学名を神戸薬科大学と変更した。これを契機に、医療を取り巻く環境の変化、薬剤師に対する社会的要請を勘案して、『創学の精神』に基づく新たな『大学の理念』を制定した。また平成18年、薬学教育の年限が延長され、6年制薬学部薬学科に移行したことに伴い、『創学の精神』と『大学の理念』を基盤にして、4つの教育目標を掲げた。これらは、本学が毎年発行している大学案内及び大学ホームページに公表されている。また、大学構内の2か所にこれらを記載したパネルが掲げられ、教職員、学生に周知されている。さらに、入学時のオリエンテーション、履修指導や講義の場を通して、学生には常々教育理念及び教育目標を理解させるべく努力している。【観

点 1-1-1】 【観点 1-1-2】

医療現場を意識した医療薬学教育は、1年次開講の「早期体験学習」、「初期体験臨床実習」で実施している。特に「初期体験臨床実習」では、神戸大学医学部（医学科、保健学科）学生とのコミュニケーションを通して、チーム医療の実際を知ること、多職種間医療人協働の重要性を認識できるよう取り組んでいる。この二つの演習科目により、入学した早い時期から、学生は本学の教育の理念と目標に基づき、医療・福祉の現状と薬剤師を取り巻く環境を理解できるシステムとなっている。5年次通年の「卒業研究Ⅰ」と6年次前期の「卒業研究Ⅱ」では、資格試験合格を目指した教育とは異なり、自らが目標を設定し、実験・研究を進めることで、問題解決能力や研究マインド及び医療人としての問題解決能力の醸成を図っている。【観点 1-1-3】

(資料：大学案内、ホームページ)

[点検・評価]

優れた点

- ・医療を取り巻く環境、薬剤師に対する社会のニーズ、学生のニーズを勘案した、新たな大学の理念、教育目標を掲げて、それをもとに教育・研究を推進し、学内外に周知させている点は評価できる。
- ・1年次の「早期体験学習」、「初期体験臨床実習」、5年次と6年次の「卒業研究Ⅰ、Ⅱ」において本学の教育・研究の理念が徹底されていることは評価できる。

改善を要する点

- ・特になし。

[改善計画]

特になし。

基準 1-2

理念と目標に合致した教育が具体的に行われていること。

【観点 1-2-1】 目標の達成度が、学生の学業成績及び在籍状況並びに卒業者の進路及び活動状況、その他必要な事項を総合的に勘案して判断されていること。

[現状]

本学のカリキュラムは『薬学教育モデル・コアカリキュラム』を遵守して編成されているが、基準 1-1 に記した理念と教育目標を達成するために、専門教育に加え、倫理性の醸成に有効な教養教育科目や基礎教育科目も多数開講されている。例えば人文科学、社会科学は『薬学準備教育ガイドライン』で〈人と文化〉として複数のものをバランスよく修得すべきとされていることから、教養選択科目として開講している。また、数学、物理学、生物学は『薬学準備教育ガイドライン』で薬学の勉学に必須の科目と位置づけられており、高校教育から大学高等教育への連続性を円滑にするための導入教育としても重要であるため、必修の基礎教育科目としている。『薬学教育モデル・コアカリキュラム』では専門科目が67ユニットに分割され、それぞれに相当数の到達目標が設定されているが、本学のカリキュラムはこれらを網羅するように編成されている。さらに、本学では低学年次より、医師、看護師など他の医療職を目指す学生との共同授業や、現職の医療人による講義を多く取り入れるなど、特に医療現場を意識した薬学教育を行っており、本学の理念に掲げる人材養成を目指して、医療人としての意識づけと学修意欲向上に心掛けている。

学生の学業成績及び在籍状況による教育目標の達成度の測定については、各期末に、各学年次の単位取得状況と進級状況が教授会に報告され、学生の学業成績や進級率を、現行カリキュラムの教育内容と進級基準、各学年の配当科目数の妥当性を判断する指標としている。それらが薬剤師を目指す学生の資質、習熟度を担保するものとして適正か否かについては、薬学共用試験と薬剤師国家試験の合格率も勘案して総合的に判断する必要があるが、現段階では特段の問題はないものと考えている。ただし、一部に留年や退学をする学生が見られることは大きな問題と認識している。留年生に関しては、担任教員による生活指導や、教科担当教員及び薬学基礎教育センターの教員による修学支援をしている。また、退学する学生に関しては、薬学部で行われている教育内容と学生が期待したものとの乖離が原因となっている場合が多く、入学前に薬学部や薬剤師の社会的役割への理解を図るため、オープンキャンパスなどの入試広報の強化に取り組んでいる。

本学が掲げる教育目標の達成度については、6年次終了後の薬剤師国家試験の結果も一つの目安であり、また卒業者の進路や社会における活動状況も重要な観点となるが、6年制教育が完成していない現時点ではまだ評価できない。【観点 1-2-1】

(資料：シラバスー履修の手引ー2009、教授会資料、進級判定会議資料)

[点検・評価]

優れた点

- ・本学のカリキュラムは、本学の理念に基づき、医療人として求められる幅広い教養と倫理性や人間性の醸成に役立つ内容であると評価できる。
- ・本学のカリキュラムは、『薬学教育モデル・コアカリキュラム』に基づいて薬系大学に求められる標準的な到達目標を満たすように、客観的な視点から編成されたものと評価できる。
- ・目標の達成度を判断するために、学生の学業成績及び在籍状況などを勘案していることは評価できる。

改善を要する点

- ・学業成績と留年者数を勘案して、カリキュラムの過密性や進級基準などについて見直しが必要である。また留年生に対する修学支援をより強化する必要がある。

[改善計画]

カリキュラムの過密性や進級基準について不断の検討をし、修学支援を強化する。